入社の辞

芥川龍之介

予（よ）は過去二年間、海軍機関学校で英語を教へた。この二年間は、予にとつて、決して不快な二年間ではない。何故と云へば予は従来、公務の余暇（よか）を以（もつ）て創作に従事し得る――或は創作の余暇を以て公務に従事し得る恩典に浴してゐたからである。

予の寡聞（くわぶん）を以てしても、甲教師は超人哲学の紹介を試みたが為に、文部当局の忌諱（きゐ）に触（ふ）れたとか聞いた。乙教師は恋愛問題の創作に耽（ふけ）つたが為に、陸軍当局の譴責（けんせき）を蒙（かうむ）つたさうである。それらの諸先生に比べれば、従来予が官立学校教師として小説家を兼業する事が出来たのは、確（たしか）に比類稀（まれ）なる御上（おかみ）の御待遇として、

難有（ありがた）く感銘すべきものであらう。尤もこれは甲先生や乙先生が堂々たる本官教授だつたのに反して、予は一介の嘱託（しよくたく）教授に過ぎなかつたから、予の呼吸し得た自由の空気の如きも、実は海軍当局が予に厚かつた結果と云ふよりも、或は単に予の存在があれどもなきが如くだつた為かも知れない。が、さう解釈する事は独（ひと）り礼を昨日の上官に失するばかりでなく、予に教師の口を世話してくれた諸先生に対しても甚だ御気の毒の至（いたり）だと思ふ。だから予は外（ほか）に差支（さしつか）へのない限り、正に海軍当局の海の如き大度量に感泣して、あの横須賀工廠（よこすかこうしやう）の恐る可き煤煙を肺の底まで吸ひこみなが

ら、永久に「それは犬である」の講釈を繰返して行つてもよかつたのである。

が、不幸にして二年間の経験によれば、予は教育家として、殊に未来の海軍将校を陶鋳すべき教育家として、いくら己惚れて見た所が、到底然るべき人物ではない。少くとも現代日本の官許教育方針を丸薬の如く服膺出来ない点だけでも、明に即刻放逐さるべき不良教師である。勿論これだけの自覚があつたにしても、一家眷属の口が乾上る惧がある以上、予は怪しげな語学の資本を運転させて、どこまでも教育家らしい店構へを張りつづける覚悟でゐた。いや、たとへ米塩の

資に窮さないにしても、下手（へた）は下手なりに創作で押して行かうと云ふ気が出なかつたなら、予は何時までも名誉ある海軍教授の看板を謹（つつし）んでぶら下（さ）げてゐたかも知れない。しかし現在の予は、既（すで）に過去の予と違つて、全精力を創作に費さない限り人生に対しても又予自身に対しても、済（す）まないやうな気がしてゐるのである。それには単に時間の上から云つても、一週五日間、午前八時から午後三時まで機械の如く学校に出頭してゐる訣（わけ）に行くものではない。そこで予は遺憾（ゐかん）ながら、当局並びに同僚たる文武教官各位の愛顧に反（そむ）いて、とうとう大阪毎日新聞へ入社する事になつた。

新聞は予に人並の給料をくれる。のみならず毎日出社すべき義務さへも強(し)ひようとはしない。これは官等の高下をも明かにしない予にとつて、白頭(はくとう)と共に勅任官を賜(たまは)るよりは遙(はるか)に居心の好い位置である。この意味に於(おい)て、予は予自身の為に心から予の入社を祝したいと思ふ。と同時に又我帝国海軍の為にも、予の如き不良教師が部内に跡(あと)を絶つた事を同じく心から祝したいと思ふ。

昔の支那人は「帰らなんいざ、田園将(まさ)に蕪(ぶ)せんとす」とか謡(うた)つた。予はまだそれほど道情を得た人間だとは思はない。が、昨(さく)の非を悔(く)い今の是(ぜ)を悟(さと)つてゐる上か

ら云へば、予も亦同じ帰去来の人である。春風は既に予が草堂の簷を吹いた。これから予も軽燕と共に、そろそろ征途へ上らうと思つてゐる。

（大正八年三月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。